

樹洞探しの旅 ー特別展「木の洞をのぞいてみたら」に寄せて

ひろたに ひろこ
広谷浩子（学芸員）

樹洞展をやろう

2004年の特別展「東洋のガラパゴス小笠原」がやっとのことでオープンし、準備に追われていたメンバーがほっと一息ついていたある日のこと。小笠原展の企画者であった^{かろべ}苅部学芸員からこんな呼びかけがありました。「樹洞^{じゅどう}っていろいろな生物が関係していておもしろいと思わない？次はみんなで樹洞展をやろう」「じゅどう？」「何？どんなもの？」「見てみたいな」と、話を聞いて興味をかきたてられたのは、私だけではなかったと思います。樹洞を扱ったシンポジウム

が何度か開かれていることもわかり（参考文献1）、コウモリやムササビ、キツツキだけでなく昆虫、菌類、植物の研究者が集っていて盛り上^{うろ}がっているようでした。大木にできる洞をふさいで枯死を防ぐ治療^{じゅもくい}をしていた樹木医に対し、シンポジウムのメンバーが樹洞の重要性を訴える呼びかけをするなどの動きもあったようです。このような問題も含めて、いろいろな生物が集う環境を博物館の展示で紹介できたらおもしろそうだなという結論に至り、樹洞の総合研究は始まりました。呼びかけた張本人はその後南の島に

さっさと調査に出かけてしまったので、残されたメンバーで樹洞展までの道のりを開拓していくことになったのです。

何をしようか？

^{ほにゅうるい}哺乳類、鳥類、昆虫、菌類、植物の分野から集ったメンバーたちは、樹洞をこれまで専門のフィールドとしていたわけではなかったもので、まずは、樹洞を探してみようということになりました。名づけて「樹洞探しの旅」です。

博物館の周辺で、樹洞がみられそうな木があるか、当時^{かしらもと}哺乳類の調査をしていたボランティアの頭本さんにもお願いして、チェックしてもらうことになりました。

博物館周辺の山にある大径木を地図におとしていくと、いくつかの地域に集中していることがわかりました。北の^{いりゅうだ}入生田の森では、スダジイの大木が林立する林や、山神社の裏の広葉樹林が樹洞の宝庫でした。南の早川沿いの森は、植林も多いのですが、急傾斜の斜面には、大木が集中する場所がありました。

このような大木のうちでも、周囲が10m以上にもなるようなりっぱな木が何本もありました。研究グループのメンバーもそれぞれが何度か訪れ、その大きさに感動したものです。

^{よこづな}横綱級の大木を入生田太郎、^{おおぜき}大関級の大木を入生田花子と呼び、樹洞展のシンボルにすることにしました（図1）。2本とも樹種はスダジイであることもわかりました。「樹洞展が始まったら、子どもたちに太郎、花子を見せてあげたいね」と、メンバーの間では話したものです。

樹洞は森のアパート

大木にはさまざまな洞ができていて、そこをのぞいて調べるのはわくわくしました（図2）。

ある日など、大きな洞を見つけたので、よじ登ってのぞこうとしたら、バサバサと大きな音がして巨大な生き物が洞から飛び出してきてびっくり。同行していた人が双眼鏡で姿をとらえたら、なんとフクロウでした。もちろん入生田では初の観察記録です。

もっと、地面に近い入り口には、ネズ



図1 入生田花子(左)と入生田太郎(上)、風格のある立派な木です（勝山輝男撮影）。



図2 樹洞調査中の筆者（加藤ゆき撮影）。

ミが丸くくりぬいたクルミが落ちていたり、地面を踏みしめた跡があったりします。樹洞内部には、昆虫のすみかもあるはず。このように、樹洞は多くの動物たちによく利用されているのです。上の階にはフクロウがいて、真ん中にはカミキリムシがいて、1階にはネズミ……。樹洞はまさに「森のアパート」です。ツキノワグマが生息するような場所では、大木の樹洞は、ツキノワグマの冬眠に使われることもあります。

どんな樹洞にどんな住人がいるのか、詳しい結果は、特別展で紹介します。

穴、孔、あな、洞？

樹洞ということばでどんな「あな」をイメージしますか？ 木の幹に^{みき}あけられた穴が樹洞ではありません。こんな穴があると、「もしかして、内側が洞になっているかも？」ということになるのです。木の幹の穴は樹洞のサインなのです（図3）。

木の幹に穴をあけるのは、キツツキなどの鳥です。中にいる昆虫を食べるために



図3 樹洞のサイン。こんな穴を木の幹に見つけたらチェック（高桑正敏撮影）。



図4 キツツキ穴（丸野内淳介撮影）。



図5 大きくえぐられた穴。樹洞がよくみえます（加藤ゆき撮影）。

くちばしをつきたててあけます（図4）。このような穴がキツツキ以外の動物によってもさらに広げられたり、奥まで深くあけられたりすると、洞ができて、キツツキやムササビ、モモンガ、リスなどの巣穴として利用されます。このような洞は、動物が利用しなくなると、木の再生力により埋まっていくことも多いそうです。

しかし、腐朽菌の働きなどにより、木そのものの枯死が進んでいく場合には、内部が大きく^{ふきゅうきん}空洞^{しんにゅう}となっていく（図5）。樹洞のできた木は、動物によって外から穴をあけられ、侵入されることも多くなるのです。元気な木のように見えても、近づいてみると、内部に樹洞ができていて、さらに表面に穴がたくさんあけられて、枯死が進んでいる場合も多いのです。

博物館の近くの森で、ムササビが使っているような穴をたくさん見つけることができました。ファイバースコープを入れて、中をのぞいてみると、洞が大きく広がっている木もたくさんありました。大木だけでなく、直径30cm程度の木でも、樹洞ができていたものがありました（図6）。

都市公園でキツツキが作った樹洞をチェックした研究では、18ヘクタールの公園で150本以上もの樹洞木を記録し、営巣が確認された樹洞の大半は、細い木に作られたものであったと報告してい

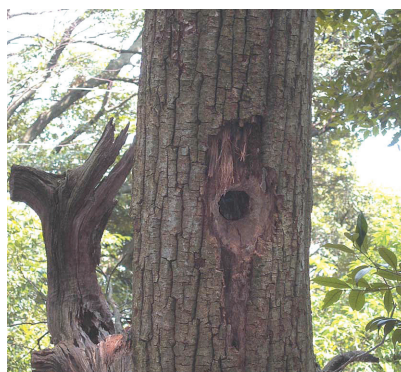


図6 ムササビ穴。穴のまわりが広げられ、樹皮がはがされているのが特徴です（丸野内淳介撮影）。



図7 「樹洞の森」三島社の森（加藤ゆき撮影）。

ます（参考文献2）。身近な公園緑地でも樹洞が営巣性動物の多様性を維持する鍵となっていたのです。

樹洞の森に出会う

「樹洞探しの旅」で、樹洞はいろいろな木にできることが自然で、森の世代交代とも関わるものだという考えに至りました。森を利用する動物相が豊かであればあるほど、大きささまざまな樹洞が様々な利用されているのです。

「樹齢100年を越すような大木ばかりに囲まれた森には、大きな樹洞もたくさんあるのでは？」と探していたら、ついに樹洞の森に出会うことができました。おおいまちのくぼ大井町篠窪にある、三島社の森です（図7）。

ここには、スダジイ、スギなどの大木が林立し、中に樹洞のできている木もたくさんありました。嵐などで倒れた木の中をのぞくと、大人でも入れそうなほど大きな樹洞ができていました。一日見ても飽きないこの森は、「多くの方たちに見ていただきたい」という趣旨のもと、地元の方々によって大切に守られていることもわかりました。

さて、「樹洞探しの旅」は、いよいよゴールをむかえました。特別展には、本物の樹洞も登場します。ぜひ、見に来てください。

（参考文献）

- 1: 樹洞シンポジウム実行委員会（2003）樹洞シンポジウム講演要旨集全17頁
- 2: 保母桂志・倉本 宣（2008）多摩丘陵都市公園の二次林における樹洞の分布。日本生態学会第55回大会講演要旨（講演番号P2-051）